

# 特殊工法で整備のサッカー場

# 都市水害に抑止効果

福岡市と福岡大(同市城南区)が、特殊工法で整備された福岡大サッカーグラウンドで、都市型水害の抑止効果を探る実証実験を進めている。昨年中に半年間行った実験結果から、グラウンドが「ため池」の役割を果たし、雨水の流出を通常の八分の一程度に抑えることが分かった。市は、同グラウンドの整備工法が河川のはんらん防止に役立つと評価。学校や公園などの整備に採用することを検討している。

サッカーグラウンドは、高まるように地盤改良工広さ約一万平方メートル。昨年、四月に、地表深さ十センチの工芝を敷き詰めている。土に固化剤などを混ぜ合、福岡大によると、グラウンドには昨年八月一週間で水を吸収し、保水力も、十二月、総計八千五百七

## 福大、福岡市が実証実験

十少の雨が降り注ぎ、このうち11%の九百五十トが流れ出た。流出量を差し引いた七千六百二十トの水は地下に染み込むか、晴天の日に蒸発したと考えられるという。

福岡市内では通常、降雨量の約80%が地中に吸収されずに河川に流れ込むという。研究班の渡辺

台風5号の影響で雨が降った昨年八月の例では、雨がやんだ後、グラウンドからの流水は十局も「ほかの都市部にも



治水の実証実験が進められているサッカーグラウンド

## 「ため池」の役割果たす

転用できると思われる内容で参考になる」と注目しているという。

市街化に伴う森林伐採や地下街・地下鉄整備な

どの影響による地盤の水機能低下は、全国で指摘されている。福岡市は

一九九九年の集中豪雨で死者が出たのを機に治水

対策を強化。河川に拡張工事を施す一方で、他の方策も探っている。

同グラウンドの実験は来年三月まで続く。市は今後、昨夏は少なかった

長雨に対する効果や、整備費用などを検証していくという。